

1-3					
主題		座面圧測定からの車椅子座位の取り組み			
副題		座位サポートケアの向上			
キーワード 1	座面圧	キーワード 2	座位姿勢	研究(実践)期間	3ヶ月

法人名・事業所名	社福) 浴風会 特別養護老人ホーム 第二南陽園
発表者(職種)	明石たかね(機能訓練指導員)、吉田真麻(機能訓練指導員)
共同研究(実践)者	なし

電話	03-3334-2197	FAX	03-3334-1748
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	第二南陽園は杉並区高井戸にある入所150床(50名×3フロア・短期入所6床)の特別養護老人ホームである。敷地内には、高齢者保健医療総合センター病院、老人保健施設、2つの特別養護老人ホーム、軽費老人ホーム、グループホーム、軽費老人ホーム等があり、総合的な高齢者医療福祉施設となっている。
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

臀部トラブル回避を目的に座面圧(以下圧と表記)状態を可視化できるSRソフトビジョンを購入し圧測定を行った。実施していく中で

①座面の奥までしっかり座った座位姿勢(以下奥座位と表記)より約3センチ程度、奥座位姿勢から臀部が前に滑った姿勢(以下すべり座と表記)から圧変化が生じ、6センチ程度のすべり座で圧上昇がみられた

②シーティングを実施しても目標値まで圧が下がらないご利用者がいた

③ティルト・リクライニング操作によって圧減少が異なった

④角度60度、45度、30度で十分に圧が減少した

今までティルト・リクライニング車椅子の使用において、ケアワーカーそれぞれの感覚で「ティルト」と「リクライニング」の関係性が曖昧な状態で車椅子を倒し離床延長していた。座位姿勢においては、誤嚥に留意した姿勢は意識していたが、軽度すべり座姿勢で過ごしているご利用者が多く見られ、臀部同一箇所に褥瘡を繰り返す車椅子由来の皮膚トラブルのご利用者もいた。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

上記①から④を参考に、姿勢と圧の関係性を理解し、車椅子操作の重要性を意識した適正な姿勢で離床できれば、座位由来の皮膚トラブルを防ぐことが出来るのではないかと考えた。その結果、皮膚トラブルが回避される事により離床時間が延長でき、ご利用者・ケアワーカー双方の負担軽減につながる事が期待できたので、他フロアに比べ離床時間が長く臀部皮膚トラブルを繰り返すご利用者が2名いた2階フロアにて取り組みを行う事とした

《3. 具体的な取り組みの内容》

- ① 奥座位とすべり座6センチにマーキングし、奥座位を意識した座り直しの徹底
- ② ティルト・リクライニング操作方法の統一
- ③ 適切なクッション使用の統一
- ④ 安楽座位の角度設定と30分毎の角度調整（昼食後おやつまでの時間内）

の4つを意識して取り組んだ。なお、拘縮変形が著しいご利用者ではシーティングやクッションを工夫しても目標座圧（能動的座位90mmHg、安楽座位60mmHg以下）に届かない場合があり、離床延長に伴う座位トラブルが生じた際は離床時間を短縮することとした。

《4. 取り組みの結果》

実践後2週間経過し、すべり座のご利用者は見られなくなってきた。そこでアンケートを実施して確認すると、取り組みの重要性や意義は理解されていたが、安楽座位が良くわからない、業務に追われ30分毎の角度調整が出来ないなどの意見があった。そこで、操作方法での圧変化、同一姿勢の負担、すべり座の不快感、安楽座位の心地よさなど、圧を確認しながら体験してもらい、取り組みを継続した。

取り組み開始2か月後に再度アンケートを実施。奥座位への意識が高まり少しのすべり座でも気にかけて座り直しを実践している、安楽座位を意識した車椅子角度の調整、クッションの重要性を意識した対応が出来ているワーカーが殆どであったが、30分毎の座位角度調整の徹底が不十分であった。

なお、1～1ヶ月半の間に臀部が悪化する傾向のあったご利用者2名に関しては、取り組み開始から臀部トラブルなく経過していた。また座位由来の皮膚トラブルは1人も出なかった。

《5. 考察、まとめ》

圧を可視化したことで、①シーティング不足やシーティングを行っていても部分的な減圧不足が生じていたこと、②少しのズレでも圧が高くなること、③同一部位に繰り返し発生する臀部皮膚トラブルの要因の1つに圧が大きく関係していることなど、圧から生じるトラブルを確認することが出来、問題点を共有できた。取り組みの中で十分に理解できていなかったことを明らかにし、取り組み内容を体験したことで、知識を高め曖昧な点を是正できた。そしてご利用者の立場に立って深く受け止められるようになり、座位サポートケアの質を高めることが出来た。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

高齢者のシーティング（2006）廣瀬秀行・木之瀬隆、三輪書店

《8. 提案と発信》

ご利用者の重度化に伴い、拘縮変形だけでなく、皮膚脆弱・低栄養・座位耐久性の問題を含んでいる事で長時間離床が難しい自発的な言動が出来ないご利用者もいる。そういったご利用者に対し、安全で安楽な座位の指標の1つとして臀部圧の可視化は大変有意義であり、多職種で情報を共有できるため、座位サポートケア方法を検討出来、離床延長実現につなげられると考える。